

## 話題50 沖縄・生と死と老いをみつめる会(2)

全国組織としての「生と死を考える会」も分裂し、中央の傘下にあった地方組織は個々に地道な活動を展開することになりました。基本的な命題、「生・老・病・死」に関する考え方は、永遠のテーマであり、かつ多面的な切り口からとらえられるため、分裂もまたあり得ることとして受け止めなければならない性格の組織かもしれません。

長年にわたり理事として組織を支えてこられた多和田真順氏、大江八重さんが故人となられた。ご冥福をお祈りいたします。

2007年12月15日、突如、「みつめる会」が目覚めます。カトリック安里教会において臨時総会が開かれ、再出発の扉が開かれました。基本に立ち返り、アルフォンス・デーケン先生の「死とどう向き合うか」のビデオ、全12巻の学習をスタートさせることになりました。

興禅寺禅堂の崎山崇源老師を顧問に、ラサール神父を組織の代表として、毎月の第四土曜日に「話題提供」と「語り合いの会」が開催され、地道な市民運動として定着しています。通称「みつめる会」も、会員の高齢化に伴い、前半10年の勢いは無くなりました。

時代は、「がん」対策が問題となり、多くの患者会が組織され、精神的ケアの重要性が指摘されて、個々に対応した支援組織が積極的に活動を展開しています。多様化した種々の組織とは異なり、病気になってから、老いてから考えるのではなく、「生と死と老いをみつめる会」は、健康な日常生活の中において、これらの問題を直視し、考え、互いに語り合い、如何に生きるかを追求し続けています。

重たいテーマにしては、明るい雰囲気での語り合いは、まさしく顧問の崎山老師と代表のラサール神父の思想と人柄に裏打ちされ、その人生経験から醸し出す人徳によるものです。感謝。

ラサール神父の思い出と、「沖縄・生と死と老いをみつめる会」の足跡でたどって綴ってみました。すべては神父のあの情熱と牽引力によるものでした。ウチナーンチュ・ラサール神父の南国的楽観主義「しわさんけー(心配するな)・なんくるないさ」の精神に支えられた活動でし

た。

85歳、高齢ですが、気持に衰えはありません。若さそのものです。多くの隣人が、神父の手となり足となり、語り続ける神父の衰える体力を支えてください。

現実の社会は、「生と死と老いをみつめる」社会ではなく、命がかくも粗末に扱われる社会になってしまいました。ラサール神父の思いは、病める現代社会にこそ必要な処方箋なのです。

なお、沖縄・生と死と老いをみつめる会（1）（2）の文章は、「グスーヨウ・ラサール・でーびる」～こよなく沖縄を愛する宣教師の物語～の出版にあたり、その会の歴史をまとめたものである。